



中嶋 領雄(なかじま みねお)
1936年生。東京外国語大学中国科卒。東京大学大学院国際関係論博士課程中退。社会学博士。東京外国語大学教授を経て95年より現職。UMAP事務総長、国大協副会長などを兼務。

視
点

ボーダレスな環境が
国際競争力をつける

インタビュー ● 東京外国語大学長
国立大学協会副会長

中嶋領雄

「ボーダレス」が時代のキーワードとして叫ばれて久しいが、インターネットの出現と普及がそれに拍車をかけ、さまざまな枠組みが一気に変わりつつある。国家、社会、企業……大学も例外ではない。単位互換制度を導入して、学生が他大学の講義を受けることは既に行われている。来春からは、東京外国語大学・一橋大学・東京工業大学・東京医科歯科大学の4

大学が連携を組む。この「4大学連合」は、単なる単位互換にとどまらず、共通教育の実施や編入学の相互受け入れなど、従来の単位互換制度からさらにふみこんだ連携システムをとるものであり、今後の高等教育機関のボーダレス的なモデルとして注目されている。

今秋、都心から郊外へキャンパスの移転を控えた東京外国語大学へは、世界中から多くの学生が集まって来る。中嶋領雄学長に、お話をうかがった。

学生はあべし
International Student

——現在の分野でも、視点を変えてみると従来の固定的な枠組みが成り立たなくなってきました。知の構築という学問の世界は、そもそも国や大学などの枠組みが意味を持た

ないボーダレスな世界そのものだと思います。自分に必用だと思う講義を一定の範囲で取ることができる4大学連合などもその代表として考えていでしょうし、先生が台湾の「国立政治大学」と交流協定を結び授業料の相互免除まで行うために、国交のない日台関係に躊躇する文部省や外務省に対して、「大学間や学問の世界、学生同士の交流には国境も民族も人種の壁もあってはならない」と説得にまわられ、実現にいたったことも、ボーダレスの象徴だと思われま

常に物事を捉えようと思っっています。東京外国語大学では、95年には、中国語・朝鮮語・モンゴル語の各学科を「東アジア課程」とするなど、14あった語学科を7課程3講座26専攻語へと改組しました。学生は主専攻語を基礎にして、「言語・情報」「総合文化」「地域国際」の3つの履修コースで専門性を明確にする教育を受けます。

今秋からキャンパスが府中市に移転しますが、新キャンパスは現在のキャンパスの3倍もあり、一度来て見ていただければ、今までの国立大学のイメージが払拭されると思いますよ。一切垣根がない開かれたキャンパスです。

中嶋 これからは従来の国民国家という枠やそれぞれの固有の文化を横断的に超えるような multicultural・multinational なる人の流れや連携などが、いっそう進んでくるでしょう。ましてや大学は、国籍や民族、人種などで壁があつてはいけません。それは一つの大学の中でも世界の大学においてもあつてはならないことです。そこそが21世紀的な高等教育や知的社会の在り方だと思えます。

私も大学もそういう一貫した考え方のもと、自分の大学や他の大学、そして世界の大学について見ていこうという、広域的な状況で

また、留学生が多いのも本学の特長です。学生数自体は約4300人とそれほど多くない中、現在610名の留学生がおり、キャンパス全体に占める割合は14%以上と、国立大学で最多です。国立大学の平均が37%ぐらいですから、東京外国語大学に来れば、まさにいながらにして留学ができる状態ですね。今後ますますと留学生に来て欲しいと思っています。ゆくゆくは「FJ共学/Foreigner-Japanese共学」というような、

外国人と日本人がクラスの中で一体化し、スタッフも一体化することを目指しています。

——かつて「留学生という考え方はもう古い」と言われていたのは、「留学生」という枠組みをわざわざ認識すること自体が無意味化しているというところですね

中嶋 そうです。留学生であらうとなかろうと学生すべてをInternational Studentとして位置づける必要があるでしょう。

そもそも、そういうことを考えると、日本の大学はhomogeneity／均質性が高くて一元的です。日本人が日本の学生に対して日本語で教えるのが普通の教育だと思われてきたわけです。そうではなく、たとえば、フランスの歴史を教えるのに、フランス人の先生がフランス語で授業を行ってもいい。特に、本学のような大学の場合はそれが有効に行える環境です。98年より短期留学生のための国際教育プログラムとして「ISEPTUFS／International Student Exchange Program of Tokyo University of Foreign Studies／東京外国語大学国際教育プログラム」を行っています。そこで

は英語で共通プログラムの講義を行い、専門プログラムは留学生の母語または専攻言語で行われています。本学の学生も科目によって受講できますので、いわば「学内留学」を経験できます。

しかし、これほど日本が国際社会の中で重要な位置を占めているというのに、そのことと教育現場との断絶がものすごくあります。日本社会は留学生、特にアジア系の留学生に対しては、部屋を貸さないなど閉鎖的です。すべてにおいて日本はまだまだ遅れている。本当の意味でもボーダレスではないし、国際化もしていないのです。そこで始まったのがUMAP and the Pacific／アジア太平洋大学交流機構です。

知的ボーダレス化で 高まる国際競争力

——UMAPとは、アジア太平洋地域内の高等教育機関の間で短期留学や学部学生・職員の交流を推進する目的で作られた組織で、先生は初代の国際事務局長をされていますね
中嶋 本学でも今年の4月から、いよいよUMAP枠の単位互換制

度を始めました。UMAPで留学する場合は奨学金もつくため、交流協定を結び、UMAP枠を使って学生を送りたいという外国の大学が多いです。今年度はまだ試験的な段階なので実際に利用した学生は少数でしたが、本学はUMAPのモデル校でもありますので、多く受け入れたいと思っています。今回、このUMAPの推進を後押ししたのは、4月の大学設置基準法改正です。卒業に必用な124単位のうち、他大学や他の教育機関から取得してもよい単位数が30単位から60単位へと増えました。これはものすごく画期的なことで、UMAPの単位互換のスキームを使えば外国の大学で大幅に単位取得ができ、卒業単位となるので、留年などしなくてもいいのです。今後、かなりの国公私立大学でUMAPの留学生が増えてくるでしょう。そうやって国際交流が盛んになり、4大学連合のように国内の大学の壁も崩れていく……それはグローバル時代の一つの在り方でしょうし、学生にとっては魅力的ではないかと思えます。

これまでは、どこの大学を出たかが重要なマルクマールになってきたわけですよ。この制度が本格的になってくると、自分がどんな先生について何を勉強してきたかが意味を持つようになってきます。国内外に関わらず、大学が有名でも科目や教員がだめならたちどころに評価が下がりますから、そういう意味でも国際競争が強まっている中、日本の大学は本当の意味で大学らしい方向に向かわないといけないのではないでしょうか。日本の大学がうかうかしていると、優秀な学生は直接外国の大学へ行ってしまう。現に、直接優秀な学生を引っ張ってこようと活動している外国の大学もあります。

独立行政法人化で揺れる国立大学や少子化で大学が淘汰の危機にさらされるといふ国内の現象がある一方で、大学市場自体が、国際化にさらされているのです。まさにボーダレスな世界が展開しています。私はそれでいいと思っています。さまざまな対立が国家という枠組みではおこっていますが、知的にボーダレスなところから融和していくかもしれないからです。大学の在り方も21世紀のものに変えていくような、大きな価値の転換が迫られているのです。

どこにいても常に光り輝く大学であるべき

——従来の大学という壁がなくなり、どこの大学に所属してもどの大学でも学べるとなると、その中であえて自分の大学らしさをどううちだしていくかという、再フレミング化も重要になってくるのではないかと思われるのですが

中嶋 重要な指摘ですね。東京外国語大学も、キャンパス移転も含め、一生懸命大学改革を行っていますが。でもね、ポータル化しようとしてグローバル化しようと、自分の大学が、常に自分の目指す分野で一番光り輝いていないとだめなんです。私も、本学は21世紀のグローバル化の時代に、一番光り輝くべき大学だと思っています。そのために努力をしてきました。留学生が増えているのは、私自身が努力しているということもありますが、東京外国語大学に來たいという留学生が世界に多いことは、本学が国際競争力を持っているということの証明です。

一橋大学や東京工業大学、東京医科歯科大学も非常に個性的です。にもかかわらず、サイズとしてそ

う大きくない。そこで、互いに共鳴するように連合することによって、さらに国際的な存在感や競争力を持てるようになればというのが今回の4大学連合構想なのです。私はよく、大学の連合を「EU」にたとえるのですが、フランスもドイツも国がなくなっているわけではありません。しかし、ユーロという共通通貨があり、EUというひとつのまとまりの中で行動している。また、欧州諸国では87年、95年に「エラスムス計画」という大学間交流があり、24カ国160大学の間で20万人以上の学生が交流しました。われわれも同じように考えているのです。

——91年の大綱化以来、急速に大学

改革が進行しており、そのあまりの変化にとまどう大学もあります。東京外国語大学は、学部改組、国立大の教員任期制導入、外部諮問委員会による評価、卒業生2万人にアンケートを行い将来の大学像に対する提言を募るなど、改革がとて早く進行している印象があります。中嶋 改革は早くすべきです。外部諮問委員会も、必要だという認識があったので、法律に先駆けて2年前にいわゆる新構想大学以外の国立大学の中では初めて行いました。そもそも、本学は大綱化の影響はほとんどありません。もともと一般教育と専門教育とが実質的には分かれておらず、一緒にな

って教育を行っていたからです。——今後、どのような大学教育改革を考えていらっしゃいますか
中嶋 大学改革の学内議論を頻繁に行っているのですが、今、学生の英語力が問題となっています。入学してくる学生は、非常に英語がよくできます。しかし、受験時がピークであり、入学後だんだん落ちていく傾向にあるのです。というのは、英語を専攻にする学生以外は、新しい言語をまず習得する必要があるので、ついつい英語がおろそかになってしまいがちです。副専攻語としての英語の授業は、その多くを非常勤講師に頼ることが多いのですが、各講師の専門によって、授業内容がバラバラなのです。そこで、習熟度別のクラスを導入するなどして、将来国際機関の職員になろうという学生を対象とした場合には、シェイクスピアよりタイムやニューズウィークの社説を読めるような英語教育を行うという方向性を与えてやる必要があるでしょう。そういう意味で、今、副専攻語のありかたを根本的に考え直すという改革が進んでいます。一見目立たない改革のように見えますが、大学像を明確にする上で重要な改革です。



特集

さらに負担の軽い選択方式に

2001年度の入試科目や選抜方法などが多くの大学で決まりつつある。大学の定員割れも現実の問題となるなか、様々な入試方法を模索している関東の大学について、入試科目を中心に変更点についてとりあげてみた。●編集部

◆流通経大

〔一般入試〕

①T方式を廃止。

②B方式2科目選択が2問選択に変更。

③A・B・C方式での選択科目「数学」の出題範囲が「数学I」から「数学I・数学A」になる。

〔推薦入試〕

特定教科推薦で、出願条件の教科成績が評定平均値4・3以上から4・0以上に変更され、選考方法では作文が廃止され、面接が加わる。

◆埼玉工大

〔一般入試〕

センター試験利用入試C試験を新

しく導入。国語・数学・理科・英語から3科目以上選択受験。

◆城西大

〔一般入試〕

①理学部数学科のI・II期試験「数学」の出題範囲で「数I・II・III・A・B・C」は変わらないが、「数B」から「確率分布」が除外され「ベクトル」「複素数と複素数平面」になる。

②センター試験利用入試を経済学部と薬学部で新たに導入。経済学部は「国語」・「地歴・公民・数学から1科目」・「英語」から3教科3科目選択。薬学部は「数学」2科目・「化学」・「英語」の3教科4科目。

〔推薦入試〕

①理学部数学科・化学科の数Ⅲ履修の条件を除外。

②理学部化学科の推薦基準の成績条件が、「数学」・「理科」・「英語」の評定平均値の合計が、10・5以上から10・0以上に変更する。「数学」・「理科」・「英語」の各教科の評定平均値についての条件は削除する。

◆駿河台大

〔一般入試〕

法学部の自己PR方式の選考方法で「書類審査」に「小論文」が加わる。

◆聖学院大

〔一般入試〕

①前期試験に3科目入試を導入。「国語」・「地歴・公民・数学から1科目」・「国語」の3科目。

②前期2科目入試の選択科目から小論文が除外される。

〔推薦入試〕

成績条件の全体の評定平均値3・3以上は変わらないが、1教科が3・5以上はどの教科でもよいに変更。

◆西武文理大

〔一般入試〕

センター試験利用入試前期・後期を導入。「国語」・「地歴・公民・数学から1科目」・「英語」の3科目。

◆東京国際大

〔一般入試〕

学研・進学情報

8₂₀₀₀

■特集 2001年度入試情報

Part1 主要私大入試変更点一覧—関東編

さらに負担の軽い選択方式に

Part2 主要私大AO入試実施校一覧

実施校昨年度より急増—約200校に

《「総合的な学習」を探る②》

「職業研究」「学部・学科研究」を 進路決定まで積み上げる

——栃木県立石橋高校の実践例

視点●インタビュー



ボーダレスな環境が 国際競争力をつける

東京外国語大学長
国立大学協会副会長 中嶋嶺雄

「ボーダレス化しようとグローバル化しようと、
自分の大学が、常に自分の目指す分野で一番
光り輝いていないとだめなんですよ」



Gakken

C O N T E N T S

1

視点●インタビュー

ボーダレスな環境が国際競争力をつける

東京外国語大学長

国立大学協会副会長 中嶋嶺雄

4

■特集 2001年度入試情報

Part1 主要私大入試変更点一覧—関東編

さらに負担の軽い選択方式に

Part2 主要私大AO入試実施校一覧

実施校昨年度より急増—約200校に

18

《小論文のためのブックレビュー⑤》

「〈対話〉のない社会」 中島義道著

20

《進学情報ネット》

「基礎学力の徹底」、7割が「要強化」ほか

22

《「総合的な学習」を探る②》

「職業研究」「学部・学科研究」を
進路決定まで積み上げる

—— 栃木県立石橋高校の実践例